

遺跡の概要

箱山第1号古墳は、三次市向江田町に所在する9基の古墳群の一つである。第1号古墳は、第2～9号古墳が尾根上に築造されているのに対して東側の斜面上に立地する。

墳丘は、一部が調査区外であったため不明確ではあるが、南北13.6m以上、東西約11.4mの南北に長い楕円形の円墳と推定できる。墳丘の北側は、斜面を大きく削って周溝を巡らせている。周溝の規模は、西側～北側で上端幅1～1.1m、底幅0.6mであるのに対して、東側では上端幅約1.8m、底幅0.9mと東側に行くに従い広くなる。また、周溝が二重に掘られる箇所も存在する。周溝の西側底面からは、須恵器の大甕の破片がまとまって出土している。墳頂は標高215.3m、高さは北側周溝底面から0.9m、南側墳裾から約3.5m、東西周溝底面から1.55mである。墳丘盛土は、地山が多く混じる土層と旧地表である黒色系の土を交互に積んで構築している。なお、墳丘の南面には外護列石が確認でき、盛土内にも列石が見られる。

埋葬施設は、花崗岩の自然石を用いた横穴式石室である。墳丘のほぼ中央に位置し、南側に開口する(S-11.25°-E)。検出した天井石は7枚を数え、最大の石材は、長さ1.3m、幅0.8m、厚さ0.7mである。石室の全長は、玄室奥壁から調査区外へ続く羨道も含めると9m以上となる。玄室は、長さ2.9m、幅1.35m、高さは奥壁で1.25mである。両壁側石は4～5段に石材を積むが、隙間が多く上に行くにつれ内傾する。奥壁の石材は6段を数え、基底石には幅約1m、高さ0.8mの板状の石材を使用しており、造りは側壁より丁寧である。床は「礫床」で、底面には20～40cm大の角礫を貼り、拳大の角礫でその間を充填している。床面は南側にやや傾斜し、さらに東西両側の床面が下がって、中央部が盛り上がる形状である。羨道部は、今回調査で約5.5mを検出しているが、調査区外のピンポールによる探査から6m以上と思われ、この地域では例の少ない長大なものである。幅は底面部分で平均0.9m、高さは概ね1mである。また、玄室同様上に行くにつれ内傾する造りである。玄室と羨道の間には、大きな板石を設置して仕切り石としている。石室の基底石には、0.5～0.8m大の石材を用いている。基底石同士は密接せず、隙間が顕著に見られ、拳大の石材や粘土質の土で充填している。石室の掘り方は、長さ9.8m以上、幅約3.2m、深さが玄室奥側約1.6mで、地山を掘り込んでいる。なお、玄室部の掘り方は一段高くなっている。

本古墳は未盗掘と考えられることから、多くの遺物が原位置を保ったまま出土している。玄室内からは、須恵器(杯蓋・杯身など)のほか、耳環や勾玉・切子玉・管玉などの玉類、鉄器などが出土した。その中でも、圭頭装飾大刀(刀身長約80cm)を含む2振りの鉄刀が出土したことは注目される。なお、遺物は意図的に隅に寄せられた様子が窺え、追葬を行った可能性が高い。また、羨道部からも多くの須恵器が出土しており、玄室寄りと羨道中央部の2グループに分けられ、玄室寄りからは蓋杯・提瓶・平瓶、羨道中央部からは蓋杯・甕・提瓶・甕が出土している。